



## 【降誕を迎える神の人たちの姿勢(1) -マリヤ-】

聖書の本文: ルカの福音書1章26-38節/暗唱聖句: ルカの福音書1章38節

じよんむちよる  
 説教者: 鄭南哲牧師

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！一週間も主の平安の中でお元気でしたか。クリスマス季節を我々は迎えています。今日から真のイエスキリストの降誕を迎えながら、どんな信仰と姿勢をもつべきなのかイエスキリストがお生まれになった当時の聖書の人々を通して学んで行きたいと思えます。だれよりもイエスがお生まれになる時に一番用いられた人と言えればその人はマリヤだったでしょう。神の御使いはイエス様の誕生をヨセフにも予告し、マリヤにも予告しました。ところがその順序をみるとマリヤが先です。今日の聖書本文はマリヤがこの出来事をどうやって受け入れ、主のご降誕を準備しているのかよくあらわしてくれます。

## ＜マリヤに対する極端な態度＞

人々の間ではマリヤに対する二つの相反されたみかたがあることが分かります。ある人たちはマリヤを高すぎに評価し、ある人たちはマリヤに対してあまりにも関心がありません。一般的にカトリックは前者に、キリスト教は後者に属する傾向があります。カトリックではマリヤを神の母とも呼んでいます。事実、ある意味としてはその言葉自体は間違っているとは言えません。なぜならイエス様がマリヤの息子であることは事実であり、そして、その方が神であることも事実ですので、マリヤが神の母という言葉は論理的に正しいかも知れません。

しかし、マリヤがイエス様の母となられたということは、人間として生まれてくるためにこの地にてイエス様の肉親の母になられたということで、永遠前からおられる神様と等しい神様の母ではないということです。またカトリックではマリヤを永遠の処女とも言っています。つまり、マリヤはイエス様を生んだ後、ふたたび、男性と関係を持たず、一生、処女として生活したという話です。そして、マリヤも昇天したという主張もあります。カトリックの文書を読んだり、絵や彫刻をみると、マリヤの昇天に関する出来事が相当扱われていることが分かります。聖書にはマリヤの昇天に関する記録はまったくありません。あまりにもマリヤを高く上げ過ぎたゆえにそのような非聖書的で、さらに偶像崇拜的傾向を持つ教理が作られたと見られます。事実、カトリックではマリヤがとりなし者になっていて、イエス様とともに救世主(きゆうせいしゅ)的な位置に置かれていてもおかしい言葉ではありません。マリヤに対するカトリックの文献や主張を調べてみると、イエス様よりマリヤの位置がもっと上に置かれているような気がします。

しかし、ほかの聖書の記事を読まず、今日の本文の記事だけでも、決してマリヤがイエス様より高く上げられないことがすぐ分かります。御使いガブリエルがマリヤにメシヤの誕生を予告する箇所をみてみてください。

“ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。…”(31-32節)

この聖句によると御使いの啓示の焦点はイエス様です。イエス様をみごもって、この世に出させた手段として用いられたマリヤという女への焦点ではありません。ですから、マリヤをイエス様とひとしく、もしくはその以上に高く上げるのは正しくありません。マリヤだけではなく、聖書のどんな素晴らしい信仰の人物であっても、人によって作られたどんな物でも神様意外には拝む対象になってはいけません。

ところが、マリヤ崇拜に近いカトリックの反対に、この女に対して全然無関心な態度はどうでしょうか。実際、我々のプロテスタントのキリスト教会ではマリヤに対する偶像崇拜的傾向をあまりにも警戒したゆえに、マリヤへの評価があまりにも低くなっているような気がします。それでは、今日の本文の前後に表されている出来事を通して、実際に聖書ではマリヤをどのように証言しているのか調べてみたいと思えます。

## ＜聖書に記録されているマリヤ＞

## 1. 女の中の祝福された方(42節)

“大声をあげて言った。「あなたは女の中の祝福された方。」あなたの胎の実も祝福されています。”

この箇所はバプテスマヨハネの母エリサベツが聖霊に満たされて言ったことばです。

41節をみてください。“エリサベツがマリヤのあいさつを聞いた時、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。”(41節)これは聖霊に満ちたメッセージですので、これを聖霊の御声として理解してもいいと思えます。

この聖句を注目してみてください。マリヤを“女の中の祝福された方”と言っただけで、“女の中でとつても上にいる女”とは言いませんでした。つまり、カトリックが主張するほど特別な位置を与えるほどの女ではないということです。しかし、たしかに特別な意味で祝福された女であることは間違いありません。

## 2. 主の母(43節)

“私の [主の母]が私のところに来られるとは、何ということでしょう。”

エリサベツとマリヤは親戚関係です。大げさに表すほどの関係ではありませんが、エリサベツはマリヤが来ている様子を見ながら聖霊に満たされて“私の主の母が私のところに来られるなんて。”と叫んでいます。ここで分かりえることは、聖書にもマリヤに表せる尊敬はきちんと表されているということです。

### 3. どの時代の人々も、幸せ者と思われる方(48節)

48節で、“主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。”

この箇所はマリヤ自身のほめ言葉です。この地球が存在している以上、どの国も、どの部族も、どの時代でも彼女を幸せ者として認めるでしょうという言葉です。ですから、こんにち我々がマリヤに神的な位置を与えなくても、マリヤは我々に尊敬をされるべき女だと言えます。

#### <マリヤの降誕の準備>

イエス様の降誕についてメッセージをいただいたマリヤはどのような反応だったのかを見て見ましょう。降誕を迎えるマリヤの姿勢をとともに考えて見たいと思います。

#### 1.マリヤの謙虚と謙遜な姿勢

28,29節で御使いのカブリエルがマリヤに神様の恵みを受けた者だと言ったとき、彼女の反応はとっても印象的です。マリヤがもし高慢な女だったなら、このような反応を表したのではないかと思います。

“私が選ばれたのは当然ではないでしょうか。私がほかの人よりはまだいいのではないかしら。”

しかし、マリヤはそうに反応しませんでした。29節,38節をみてください。

“しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。”

“マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。…」”

ここでははしためという言葉はとっても身分の低い女しもべを言います。それほどマリヤは心から自分を低くしました。

“私は主の御前で言葉では言い表せないほどの卑しい女です。ほんとうに主のはしためにすぎません。”

マリヤはこのような謙虚と謙遜な姿勢で神様のメッセージをいただき、降誕の知らせを身に受けたのです。この地に來られたイエスキリストを迎え、降誕を迎える我々も当然持つべき始めの姿勢! それは神様の御前で徹底的に自分を低くし、謙虚な姿勢を持つことです。神様はご自分のお働きのためにはかならず神様の御言葉に敬虔に受け止め、謙遜に聞き従う人々を用いるお方であることを降誕を迎えながら今日我々ももう一度心に刻んでおくべきではないでしょうか。「主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。」(ミカ書6:8)

「しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる」(ヤコブの手紙4:6)

#### 2.マリヤの信仰の姿勢

本文の34節をみてください。

“そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」”

これは具体的に自分をとおしてメシヤが生まれるというメッセージを受けた時のマリヤの反応です。ここでマリヤの言い方は“どうやってそれが可能になるのでしょうか。”という質問であって、疑いではありません。

すると御使いはどのように答えましたか。人間の理性では理解できない事に対して“どうやって”と聞かれる人々に主は時々こう答えてくださいます。37節をみてください。“神にとって不可能なことは一つもありません。”

この言葉は神様が始めに不可能な妊娠をアブラハムに告げられたときに言われた言葉です。無から有を創造された全能の神様が介入されるなら不可能なことがあるでしょうか。人には不可能でも神様に不可能はありません。

これに38節、マリヤの反応をみてください。

“マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」こうして御使いは彼女から去って行った。”

この箇所を見てもさきマリヤの質問は決して疑いから出た言葉ではないことがわかります。マリヤは自分に施された神様の御言葉を信じ、そしてその御言葉に基づいてメシヤが自分をとおして生まれると言う事実も信じました。主の御使いはそのマリヤに“信じる女は幸いである。主が彼女に言われた御言葉はかならず成就(じょうじゅ)される”と約束されます。マリヤは信仰によって主をほめたたえます。

“マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。」(46,47節)

マリヤがキリストを自分の救い主、主として信じ、信頼していることがわかります。マリヤは神様の御言葉を信じ、その御言葉が証しているイエスキリストを信じました。みなさんは今年、神様の恵みに対する感謝と喜びの信仰をどのように表しているのでしょうか。マリヤは神様の御言葉の前で、この信仰をもって表わし、自分をとおしてこの世に來られるメシヤを待ち望んでいたのです。クリスマスを迎えながら我々をも自分の考えと違い、自分の思いと違っても、神様の御言葉が自分の人生をとおして成し遂げられることこそが最高の祝福であり、恵みであることを信じ、この地に來られたイエスキリストを喜びほめたたえながら信仰によって迎えるクリスマスとなりますように祈ります。

#### 3. マリヤの従順の姿勢

“マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたの[おことばどおり]この身になりますように。”(38節)

これは信じる信仰の姿勢だけではなく、一步踏み出した従順です。“お望みなら私を用いてください。私は御言葉に従います。”今日はこの出来事について簡単に言えるかも知れません。しかし、当時の状況に戻って、マリヤの立場で考えてみると、これはそうとうの代価と犠牲を覚悟しなければならない状況であったことがわかります。御言葉に従って、みごもった結果、受けるべき侮辱と恥と誤解などを考えて見て下さい。当時、まだ結婚も成立されていない女がみごもったというわさが広がると、当時ユダヤ人の律法によると、人々に石をなげられ、殺されなければならない状況でした。ですから、この世に来られるイエスキリストがマリヤをとおして生まれるという御言葉にマリヤが従ったのは死を覚悟するほどでした。ルカの福音書2章34節以下に記録されたシメオンの予言を考える時、マリヤの従順はもっと感動的になります。

“また、シメオンは両親を祝福し、母マリヤに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。[剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。]”(34,35節)

どんな意味ですか。剣で刺し貫くような痛みと苦しみの中で生活しなければならなかったマリヤの人生を考えて見て下さい。みごもったその瞬間から多くの人の目を気にしながら生きなければならなかったし、産みの苦しみの中で生んで、愛し、仕えてきた息子が十字架につけられた光景を目の前にしなければならなかった、マリヤの人生を考えながらこの御言葉を読んで見て下さい。この従順は苦難を覚悟し、さらに死までも覚悟した従順でした。

### クリスマスを迎える我らの姿はどうでしょうか。

我々は神様の御言葉に従う前に、自分にどんな結果が戻ってくるだろうか、どんな損をするのか、どこまで犠牲を払うべきなのか、さきに計算し、考える時があります。マリヤの従順の前で我々は恥ずかしいと思わなければなりません。神様のおことばへの従順の代価がたとえ死であったとしてもそれを喜んで受け入れようとしていた一人の女の従順を通してメシヤなるイエスキリストはこの世に来ることができたのです。今年のクリスマスを迎えながら我々も、最後まで、自分が時には犠牲になり、苦難がやってきたとしても神様に最後まで神事従う信仰の従順を持つべきではありませんか。

35節で 御使いはマリヤにこのように伝えます。

“御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。」。ここで“おお”という単語が大切です。これは旧約のテント(聖幕)に使われていた用語として、テントが建てられた後、その上に神様の臨在を象徴する雲(シェキナ)がおおわれたように、聖霊の力がマリヤをおおうという話です。神様はメシヤをこの世に来させるために通路としてマリヤを用いられたのです。

愛する信仰の家族のみなさん、神様は我々の自由の意志を折りながらまで従順を要求される方ではありません。主は我々が自らこの従順を主に捧げることを望んでおられます。

“主よ。主がお望みになるなら、私を用いてください。”マリヤは神様に体だけ捧げたものではありません。46節以下をもう一度みてください。“マリヤが言った。[わがたましいは]主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。(46,47)”

処女が身ごもることの苦しみと苦難を予想しながらでもマリヤは神様を賛美し喜んでいます。そして告白しています。

“わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。”

この箇所はマリヤ自身が自分の体と心とたましいを主にどれだけささげたがっていたのか主への献身の徹底した姿勢を見ることができます。そして、やがて救い主の主が来られ我々を救ってください、罪の暗闇の中苦しめられ、抑制(よくせい)されていた人々を愛し、御自分の民のためになしてくださいと祈る神様を待ち望む姿です。救い主として、愛の主として来られ我々を助けてくださるすばらしい方の美しい働きを待ち望んでいるマリヤの賛美、この賛美の姿勢こそ主を待ち望むマリヤの心を理解させてくださっています。我々もこの地に来られた救い主なるイエスキリストに対する心からの献身と賛美の姿勢を回復し、迎えようではありませんか。

### メッセージを終らせます。

主がこの地に来られた意味を黙想するこの季節に、今年は特に、神様に喜ばされたマリヤからクリスマスを待ち望む姿勢を学んで行きたいと思えます。マリヤのように、神の御言葉に対して謙虚に聞き、謙遜にする姿勢、信仰の姿勢、従順の姿勢、献身と賛美の姿勢をもって、この地に来られたイエスキリストを迎えるクリスチャンプレイズチャーチのみなさんとなりますよう我らの救い主なるイエスキリストの御名によって祝福します。アーメン!